

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530887

研究課題名（和文） 貧困・生活不安定家族出身者および児童福祉施設経験者の排除型移行過程と社会的支援

研究課題名（英文） Study on transition process and social support for excluded lower-class youth and care-leaver

研究代表者

西田 芳正（NISHIDA YOSHIMASA）

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：10254450

研究成果の概要（和文）：格差拡大、貧困層の増加が進むなかで困難な状況に陥っている人々に対して有効な社会的支援を行うためには、そうした状況にある人々の生活を詳細に捉えることが不可欠である。我々は、貧困家庭、不安定な条件に置かれた家庭の出身者と児童養護施設を経験した若者たちへの質的調査を行い、子どもから大人への移行過程が排除に至る性格をもち、その背景に日本社会の家族依存的な特性があることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Recently, disparity and poverty has been widening at a rapid pace in Japan. It is necessary to conduct a detailed study on lives of excluded population in order to provide effective social support. We pursued some qualitative researches on transition process of lower-class youth and care-leavers. In a result, there are clear tendencies which lead the exclusion. We also found that it has strong relevance to highly family-dependent system in Japanese society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：社会的排除、貧困、児童養護施設、移行過程

1. 研究開始当初の背景

(1) 「格差」「貧困問題」の顕在化；1990年代の半ば以降、「格差」「不平等」といった問題が日本社会においても注目を集め、2000

年代に入ると「貧困」という言葉さえもマスコミ等で使われ始めるなど、格差、貧困問題が急速に拡大、深刻化していった。2008年秋の「リーマンショック」は、それらの問題

現象を一気に顕在化させたものと言える。こうしたなかで、社会問題として特に多くの関心が向けられたテーマが若者の生活困難であり、さらには「子どもの貧困」問題が、教育、健康などさまざまな側面から注目され始めて今日に至っている。

(2) 「子ども・若者の社会的排除」をテーマとした我々の研究グループの蓄積；研究代表者を中心とするグループは、部落問題を中心にマイノリティの教育、労働、地域生活を対象として研究を進めてきたが、2000年代に入って以降、中卒・高校中退など早期に学校を離れた若者たちを対象とする調査を実施したことを契機として、「子ども・若者の社会的排除」をテーマとする一連の調査を継続的に実施することになった。その過程で、貧困・不安定な家庭状況から児童養護施設に措置された子どもたちの学校や施設での経験、施設を離れた後の生活状況が非常に厳しいものであることを知り、「排除を典型的に経験」する層として生活史調査を実施したほか、「児童自立支援施設」の子どもたち、「母子家庭」の母と子など、排除を深刻なかたちで経験する子ども、若者、親を対象とする多様な調査を継続してきた。

2. 研究の目的

(1) 貧困層および不安定な要因を抱える家族で生育する子どもたちは、早期に学校を離れ、親と同様の不安定な大人の生活に移行することが、我々が行ってきた調査において確認されており、経済社会の大きな変化のなかで、そうした傾向はさらに強まっている。排除状況を軽減し、そうした子ども・若者を生み出さないための有効な支援策と制度改変が緊急の課題として求められている。

(2) 支援策と制度改変を構想する際に重要な点は、困難な状況に追いやられた子ども、若者、親たちの生活を、その構造的・歴史的背景要因を踏まえうえて詳細に捉えることが前提として必須だということである。そこで本研究では、排除を典型的に被っている子ども、若者、親たちを対象とし、生活史調査、観察調査、さらには施設に残された生活記録の分析など多様な方法を用いて、家族・学校・余暇・労働生活の把握と排除に至るメカニズムを明らかにし、支援策の検討を行うことを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、主として4つの対象を設定し、それぞれにふさわしい方法を用いることで先の課題に応えることを目指している。

(1) 児童養護施設経験者への生活史調査；この科研調査に先立ち、児童養護施設を

経験した若者13名に対する生活史インタビューを実施している。本研究では、そこで得られたトランスクリプトの分析とともに、施設、学校関係者へのヒアリング、関連文献の検討などを行った。

(2) 児童自立支援施設のケース記録分析；児童自立支援施設に保存されている過去の入所者の家庭背景、措置経過、入所中の生活、退所後の状況等に関する膨大な記録を分析し、非行性の高い子どもが生み出される背景要因、施設処遇のあり方、退所後の状況と支援の方向について検討する。プライバシー保護のため、記録を読み進め必要な情報を匿名化したうえでデータ化する作業は、当該施設内でのみ実施することになる。

(3) 貧困・生活不安定層の集住地域における若者調査；大阪大都市圏のなかで貧困・生活不安定層が集住しているエリアを対象とし、若者の生活と労働について、生活史調査、観察調査により明らかにする。

(4) 母子家庭調査；我々が実施した自治体の住民総合調査のなかで収集された母子家庭に関するデータを、社会的排除の観点から再分析する。

4. 研究成果

(1) 2010年2月に、児童養護施設経験者に対する生活史調査の成果を書籍『児童養護施設と社会的排除』として公刊した。児童養護施設に関する従来の研究成果の多くが、児童福祉領域の職員養成教育のテキストという性格をもつため、施設に措置される子どもたちの家庭および学校における排除的な経験、施設への資源配分が決定的に不足していることからくる施設での疎外的経験、施設を出たあとに経験される社会的排除状況についての分析は不十分なものであった。本書は、当事者の経験を素材とした点だけでなく、施設職員による施設改革の取り組みや退所後の当事者活動などにも言及しており、児童養護施設の現状を捉える上での重要な文献としての評価を得ている。また、「家族依存」をキーワードとして、日本社会における排除のメカニズムを整理した点でも評価されている。

(2) 児童自立支援施設のケース記録分析作業は、当初膨大な記録の中から一部を抽出して読み込み、必要な情報を匿名化してデータ化するという作業を行ってきたが、記録の持つ意味の重要性を踏まえ、途中から悉皆に切り替えての作業とした。「方法」において記したように制約の大きななかでの作業であり、本科研調査期間中は、記録を読み込みデ

一タ化する作業を終える段階に留まっている。今後、学会報告および論文、書籍の形で成果を公表していくことになる。

(3) 「文化住宅街」および大阪湾岸部の貧困・生活不安定層集住地域をフィールドとした調査を行い、その成果を学会で報告した他、その成果を含む著作を公刊している。

(4) 「母子家庭調査」について再分析した結果を学会で報告、論文として発表している。本科研調査の期間中に3名が遠隔地の大学に異動したため十分な時間がとれず、このテーマについての成果はわずかなものにとどまっている。

なお、本科研調査の成果を含む社会的排除関連の研究の知見を、研究代表者が『排除する社会・排除に抗する学校』として2012年3月に公刊した。本書は、「文化住宅街」、ブルーカラー集住地域など、貧困・生活不安定層が多いエリアの形成史と地域生活の特徴を明らかにし、親と同様の生活へと早期に参入する移行過程の特徴を「自然な移り行き」として整理した。これに対して中高階層の移行過程を「高達成に向けた投資・配慮と努力」として対比し、社会的関心および研究者の関心が後者に集中し、教育をめぐる議論と制度変更も前者については考慮されることなく進められたことを明らかにした。さらに、雇用全体の不安定化に加えて低学歴層の受け皿となってきた「底辺労働市場」が縮小することで、「自然な移り行き」が困難なものとなり、貧困・生活不安定層出身の若者、親を頼れない施設経験者には、住居すら失う者も現れている。排除型移行過程に追いやられた子ども・若者が増加するなかで、なによりも求められるのが学校教育における十分な支援であり、児童養護施設の子どもたちを組織としてサポートしている学校の実践事例などを参照しつつ、「排除に抗する学校」の不可欠性とそれを実現する条件についても考察している。

学校教育について焦点化したため、家族・労働面での支援の方策についての検討を欠いているが、排除のメカニズムと軽減の方策を示した点で、一連の調査研究の現時点での総括とすることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計12件)

- ① 西田芳正、大都市流入層の地域形成と生活様式—文化住宅街の社会学、西日本社会学会年報、査読無、10、2012、17-30
- ② 妻木進吾、貧困・社会的排除の地域的顕

在—再不安定化する都市部落、社会学評論、査読有、62、2012、489-502

- ③ 西田芳正、貧困・生活不安定層の学校経験と移行過程、青少年問題、査読有、58、2011、32-37
- ④ 内田龍史、児童養護施設へのまなざしと〈家族依存社会〉の問題、部落解放、査読無、651、2011、21-28
- ⑤ 長瀬正子、社会的養護で育つ子どもたち—児童養護施設での生活とその後、部落解放、査読無、651、2011、29-35
- ⑥ 妻木進吾、不安定化する都市部落の若年層—2009年住吉地域労働実態調査から、部落解放研究、査読有、189、2011、2-11
- ⑦ 西田芳正、貧困・生活不安定層における子どもから大人への移行過程とその変容、犯罪社会学研究、査読無、35、2010、38-53
- ⑧ 内田龍史、菅野正之、大阪市における若者の就業構造の変化と生活様式—「大阪市若者の仕事とくらし調査」から、都市文化研究、査読有、12、2010、98-112
- ⑨ 堤圭史郎、ホームレスの人々への典型的な理解と「孤立」のリアリティ、ホームレスと社会、査読有、1、2009、50-57
- ⑩ 西田芳正、自己責任論とアンダークラス論を乗り越えるために—若者と貧困に関する実証研究の課題、貧困研究、査読無、2、2009、72-79

〔学会発表〕(計10件)

- ① 堤圭史郎、「生きづらさ」に向き合うホームレス支援、日本社会病理学会、2011年10月2日、大正大学
- ② 西田芳正、子どもから大人への移行過程の多層性と地域社会、地域社会学会、2011年5月14日、山口大学
- ③ 西田芳正、その後の「排除される若者たち」—連合ワーキングプア調査の知見から、貧困・生活不安定層の20代~40代の経験をたどる、日本教育社会学会、2010年9月18日、関西大学
- ④ 内田龍史、妻木進吾、変容する都市型部落—2009年住吉地域労働実態調査から、関西社会学会、2010年5月29日、名古屋市立大学
- ⑤ 西田芳正、堤圭史郎、妻木進吾、母子世帯調査報告—階層差の実態と研究の視点、貧困研究会、2009年10月17日、大阪市立大学
- ⑥ 長瀬正子、児童養護施設現場における『子どもの権利ノート』導入によってもたらされた変化—大阪府内の施設職員に対するインタビュー調査から、日本社会福祉学会、2009年10月11日、法政大学
- ⑦ 西田芳正、貧困・生活不安定層における子ども期の生活と移行過程、日本教育社会学会、2009年9月13日、早稲田大学

〔図書〕（計3件）

- ① 西田芳正、大阪大学出版会、排除する社会・排除に抗する学校、2012、287
- ② 西田芳正編著、妻木進吾、長瀬正子、内田龍史、解放出版社、児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界、2011、215

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 芳正 (NISHIDA YOSHIMASA)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：10254450

(2) 研究分担者

内田 龍史 (UCHIDA RYUUSHI)
尚綱学院大学・総合人間科学部・専任講師
研究者番号：60515394
妻木 進吾 (TSUMAKI SHINGO)
目白大学・社会学部・専任講師
研究者番号：60514883
長瀬 正子 (NAGASE MASAKO)
常盤会短期大学・幼児教育科・専任講師
研究者番号：20442296
堤 圭史郎 (TSUTSUMI KEISHIEOU)
福岡県立大学・人間社会学部・専任講師
研究者番号：70514826

(3) 連携研究者

()
研究者番号：